

老舍『大地龍蛇』試論

著者	渡辺 武秀
著者別名	WATANABE Takehide
雑誌名	八戸工業大学異分野融合科学研究所紀要
巻	8
ページ	39-52
発行年	2010-03-24
URL	http://id.nii.ac.jp/1078/00002321/

老舍『大地龍蛇』試論

渡 辺 武 秀*

On Lao She's "Da Di Long She"

Takehide WATANABE*

概論

“大地龍蛇”是老舍先生在 1941 年创造的话剧，也是他的第五个话剧作品。其中，老舍先生采用歌舞的形式来展现剧情，因此使得这部白话剧格外具有吸引力。

这篇“大地龍蛇”描写的是抗战的故事。以重庆的赵祥琛家为舞台背景。他家有三个孩子，老大立真、老二兴邦、老三是女儿，叫素渊。

剧情开始，由出场人物的相继的对话，明显地感觉到主人公——作为父亲的赵祥琛对三个孩子强烈的不满，甚至经常发脾气。有一天，已经参加抗战五年的老二回老家。父亲仍然对老二去抗战的事情，不满，大发牢骚。在这种情形下，为了能取得父亲的理解，三个孩子分别向父亲说明各自参加抗战的目的和作用。听了孩子们的肺腑之言，父亲开始有点转变了，最终竟然也要参与抗战运动中去。

这篇话剧里，随着剧情的展开和深入，渐渐地表现出在那样一个特殊的年代，无论男女老幼，都应当投入到抗战中的主题来。这也是老舍先生创作的意图。特别是通过歌舞的地方，使得整部作品的表达更加鲜明，更加深入人心。

はじめに

一

この『大地龍蛇』という作品是老舍の白話劇（口語の劇）である。この劇は 1941 年 9 月 3 日に書き始められ、10 月 7 日に脱稿され、この年の 11 月に国民図書出版社から出版されている。^(注1) 老舍は、これ以前にすでに四つの劇『残霧』(1939)『国家至上』(1940)『張自忠』(1940)『面子問題』(1941)を創作しており、これが老舍自身の劇としては第五作目の作品に当たる。

老舍の従前の四つの劇についてはすでに考察したことがある。^(注2) 今回は、その成果に基づき、引き続き、この『大地龍蛇』を取り上げ論じてみたい。

この『大地龍蛇』には、すぐに、形式、内容の上にこれまでの劇に見られないいくつかの傾向があることが見て取れる。例えば、この劇が「三幕話劇歌舞混合劇（三幕、話劇、歌、舞踏の混合劇）」である点もそのひとつといえる。これまでの劇に「歌」や「舞踏」を取り込んだものはない。

このようなこと踏まえ、この論考では、この作品の構成を見極め、更にストーリーの展開を追い、そこから、作者はこの作品で何をどのように描いているのかを考え、そして、この分析の中から見える作者の主張を明らかにしてみたい。こういったことを行うことによって、老舍の以前の劇作品との相違、類似などが解ってくると思われる。

1941 年 11 月、老舍は単行本出版に当たり、この劇に「序」を付している。ここで、作者自身が、この劇のテーマ並びに創作の方向をかなり明確に語っている。本論で行う考察の参考になるので、いささか長くなるが、分析に入る前に、まず、これらの点を確認して置きたい。

(1) テーマについて

冒頭で、この劇は東方文化協会から依頼されたもので、この協会が示したテーマは「東方文化」であったことを述べている。^(注3) つまり、この劇には「東方文化」が話題として持ち込まれているということである。

(2) 舞踏、歌の導入について

すでに述べたように、これまでの老舍劇にない特徴は、この劇では台詞だけでなく、歌と舞踏を導入していることであるが、作者は、このことについて、以下のように述べている。

さらに何日も考えて、私は劇の体裁についての考えを決定した。つまり、もし劇の完全性を放棄し、歌、舞踏などの成分を劇の中に入れるとすれば、これによって表現方法の幅が広がるばかりか、表現するものも、たとえ一網打尽とまではいかなくとも、少なくとも、もっぱら話劇のみに頼るよりもすこし広がるだろう。^(注4)

* 基礎教育研究センター・教授

作者はこの方法を「拼盤（盛り合わせの）方法」と自

ら呼ぶ。一つの大皿にたくさんの食べ物を盛る料理、つまりオードブル風の方法として、この劇に「歌」「歌舞」を導入したというのである。この表現形式は台詞だけの場合に比べれば、具体性はないが、観客の視覚、聴覚に訴え、ある一つのイメージを一挙に相手の感情に訴えるという点では優れていると思われる。

(3) 劇創作の方向について

①「抗戦」の意義と「文化」の関係

そもそも「抗戦」（日本軍の侵略に対する戦いのこと）と「文化」（この場合、「東方文化」を指す）は如何に関わり合っているのか。

（この作品は）当然抗戦の物語である。抗戦の目的はわれわれの文化の生存を保つことにある。文化の自由なる生存があってこそ、文化に歴史の反映と存続が保たれるのである。——人は存在しても、もし文化がなければ、必ず奴隷になりさがって行く。また、抗戦時期は、文化を検討する、まさに絶好の機会といえる。なぜなら我々はすでに最大の犠牲を惜しまず文化を守ってきたのだから、この時に、文化の力はどうだったのか、その長所短所を検討すべきなのであり、そこから文化の過去、現在、未来を見極めるべきである。^(注5)

「文化」と「抗戦」との関係が二つ明らかにされている。

まず、自国の「文化」を守るということで、「抗戦」は「文化」と関わる。国民がその国に属しているかは、その国民がその国の「文化」を持っているか否かに依る。もしその国の国民が「文化」が持っていないならば、それは他国の奴隷と同じなのである。だからこそ「抗戦」をして「文化」を守らねばならない。

次に、「抗戦」が「文化」の長所、短所を見定める良い機会ともなり得るという点で、「抗戦」は「文化」と関係を持つ。「文化」といっても全て良いものとは限らない。「文化」にも社会、国民に有効なものとはそうでないものがある。平和な時には、これをはっきりさせるのは容易ではないが、「抗戦」という国家存亡の危機という状況の中で、「文化」が「抗戦」にどのように作用したかを検討すれば、「文化」の長所、短所がはっきり見えてくるはずである。

②過去、現在、未来における「文化」、その役割、その在り方

さらに「過去」の「文化」は「過去」においては優れた「文化」であった。「現在」にあっては、その「文化」の優れた部分が「抗戦」を支えている。そして「文化」が「未来」に存続して行くためには「文化」自身がどのように在るべきか。

まず「過去」についてである。

過去、その時期にわれわれには自分たちの高度な

文化があったということは認めて良い。たとえ外国のご飯を食べ慣れた輩が、外国の月は中国のものよりずっと明るいと声高々に述べたとしても、世界歴史上においては、中国文化を軽視したことはなかったのである。^(注6)

「過去」に於いて中国に素晴らしい文化が存在したかについては、もう言うまでもなからう。

「現在」はどうか。今の「抗戦」時期に「文化」の優れた部分がどう作用しているか。

現在ということになれば、心底から漢奸である人物以外、誰でも、われわれのほとんど字を知らない軍民が勇敢に敵の機械化された部隊に挑んで行き、しかも四年余りも挑み続けて、敵を右往左往させたことを知っている。この事実からすれば、必ずこの様にさせしめる深くて厚い文化の力があるということなのである。もしこのような文化がなければ、仮にこれを奇跡に帰すべきだとしても、今日の世界において、こんな奇跡というものは決して起こったことはない。^(注7)

今回の四年間の日本軍に対する「抗戦」の成功を支えたのは、深く厚い「文化」の存在である。「抗戦」は「文化」を守るためであるが、「文化」の方も「抗戦」を支えるという関係になっている。

さらには「未来」である。「将来については、われわれは、抗戦に必ず勝利するという自信によって、自ずとふたつのことに思い至る。」^(注8)と述べ、以下の引用を挙げている。

その一つである。

中華を先鋒として啓示するということである。東方民族——日本の良識的な人物をも含む——は、必ず二度と一時的安逸といった平和ではなく、堂々とした態度で、血肉でもって、本当の平和を獲得すべきである。日本軍閥の南進——経済的、軍事的にかかわらず、——は、まさに中国からインドに至る各民族の覚醒のチャンスなのである。みんなにこの覚醒があってはじめて、日本軍閥の嘘っぱちの平和の罠にはまり、靈魂が鎖や鞭で痛めつけられるようなことが起こらないはずである。^(注9)

中国の「抗戦」勝利の経験。これを「抗戦」によって得た「文化」ということもできるだろう。これが将来、「何」に対し、「如何」に影響を与えて行くか。この「文化」を学ぶことで、例えば、各地域の、各民族が、必ず目覚め、自分たちで自分たちの平和を戦い取る動きを始めるだろう。こうして獲得した平和こそが、各地域、各民族の本当の平和なのである。

次の引用が、その二つ目として挙げられているところである。

ひとつの文化が生存し続けるためには、必ずそれに自己批判能力を備えており、時に自分を矯正し、自分を充実させるということを実施して行く必要がある。老舗の看板を掲げ、自慢し傲慢になり、意固地にさらにもう一歩進むことを拒むようなら、自ら滅亡の道を進むことになるだろう。抗戦中に、われわれは固有の、文化の力を認めたが、同時にわれわれの欠陥も発見した。——抗戦は文化に「エックス線」を当てた。生死の間では、われわれは絶対に病をごまかし治療を避けるようなことをしてはいけない。何を去り、何を取るか、自分たちの力で最善を尽くすべきだ。^(注10)

今回の「抗戦」は「文化」の悪いところ、良いところを、「エックス線」を当てて、明らかにし、そして生死のぎりぎりのところで、「文化」の悪いところの矯正、良いところの充実を迫った。この結果、旧い「文化」は純化され、また全く新しい「文化」も生まれた。そしてさらに、この「文化」のさらなる生存には、自己批判、そして改善し、その上で充実させるというサイクルが動き続けて行く必要があるだろう。

(3) まとめ

この「序」から、作者がこの作品で何を描き出そうとしているのか、が読み取れるのではないか。

この劇は「抗戦」劇である。だから、性格からして、観客に「抗戦」の意義を分からせなければならないという宿命を背負っている。これがこの劇の大前提である。また、同時に、この劇では「東方文化」（以下「文化」と略す）を取り上げることが要請されている。

この「抗戦」と「文化」の関係のうち、「抗戦」を「文化」が支えているという関係に注目したい。ただし、この時、「文化」のすべてが「抗戦」を支えているわけではない。「文化」にも長短がある。この長短の判断基準は、言うまでもなく、「抗戦」を妨げるものは「非」であり、「抗戦」に有効なものは「是」ということになるだろう。

したがって、この劇では、いろんな人物を登場させ、この判断基準でもって、登場人物が持つ、抗戦期に存在する様々な「文化」——過去、現在の「文化」を検討することになる。この結果、様々な「文化」のうち、もっと「抗戦」に有効なものが浮かび上がってくることになるだろう。これを、或いは、「抗戦」期における、世代男女の区別を越えた、人々に最も必要とされる「ある態度」ということでもできるのではないか。この「ある態度」こそが「抗戦」を支えることになる。つまり、この劇で行われているのは、この「ある態度」が、どのようなものかを描き出すことにあるということもできるだろう。

そして、この「抗戦」に有効な「ある態度」は、実は

決して「抗戦」だけのレベルに留まるものではなく、「平和」建設、「未来」建設にも有効に働くという普遍性も兼ね備えている。

この劇を、作者はこのように作っていると考えられる。では、実際に、劇ではどうか、これから分析して行こう。

二

ここで全体の構成を簡単に示しておきたい。

この劇は「三幕話劇歌舞混合劇」であり、「第一幕」が「第一節」と「第二節」、「第二幕」も「第一節」と「第二節」から成っており、最後の「第三幕」に「節」はない。

この劇を各場面によって分ければ五つの部分に分けることができる。この五つの部分を表にしたのが以下である。

幕・節	時間・場所	表現法
①第一幕 第一節	抗戦四年（1941）の秋・重慶	台詞
②第二節	綏遠事件（1936年） 綏西	台詞・歌
③第二幕 第一節	抗戦四年の秋 重慶	台詞
④第二節	不明	歌・舞踏
⑤第三幕	20年後 青島	台詞・歌

この一覧表から次の点を読み取ることができるように思う。

(1) この劇は①（現在）→②（過去）→③（現在）→④（不明）→⑤（未来）という時間の展開になっている。

この劇に於ける「現在」は抗戦四年目の秋である。つまり西暦の1941年の秋になる。この年は、まさに作者の執筆時期に重なる。当時の観客は、この「現在」から劇のストーリーに引き込まれ、時には「過去」「未来」へと連れて行かれることになる。

そして場所は①（重慶）→②（綏西）→③（重慶）→④（不明）→⑤（青島）と変化する。

これをまとめれば以下ようになる。

この劇は「現在」の重慶から始まり、その場面から「過去」の綏西の戦いの回想シーンに移って行く。この回想場面が「歌」と「台詞」で描かれている。

その後に再度「現在」の重慶での場面に戻る。それから、「現在」を飛び出し、「過去」も「将来」もすべて含む「抗戦」の展開が舞台で主に「舞踏」という表現形式で描き出される。

そして、最後に二〇年後の「未来」の、青島における中国社会の様子が描かれ、この劇の幕が下りる。

(2) また、「現在」以外の場面には、様々な地域の、様々な民族が登場してくる。これもこの劇の特徴の一つといえる。これについても、ここで、少し触れておこう。

この点については、例えば「第一幕」「第一節」のト書きの登場人物紹介の部分を示せば、劇の方向性がいくらか推測できるように思う。

趙興邦：趙庠琛の次男。戦争が始まって、「抗戦」に参加した人物。

竺法救：インドの医者。綏西の軍隊で奉仕している。

巴顔図：モンゴル人の兵。

穆 沙：イスラム人の兵。

李漢雄：陝西省の人。綏遠で兵隊になった。

馬志遠：日本人の兵。中国軍に降伏した。馬の管理、世話をしている。——捕虜ではない。

羅桑旺賛：チベットの僧侶。軍隊に慰問に来ている。

朴継周：朝鮮の義勇兵

林祖榮：シンガポールの華僑日報の綏西駐在通信記者。

黄永恵：シンガポール華僑代表。綏西に軍事慰問団として来ている。

軍 隊：即ち大合唱団。数十人。(注11)

ここには東アジアの各地域の、各民族が、日本軍への「抗戦」の舞台に登場している。この、登場人物のト書きから以下のようなことを読み取ることができよう。

作者は、この「抗戦」を単なる日本軍対中国軍との戦いという構図で捉えるのではなく、もっと大きな範疇、つまり日本軍と、「正義」の旗の下に集まった、日本人をも含む東アジア民族との戦い、或いは「正義」と「非道」との戦いという枠で描き出そうとしているように見える。

三

次に、ストーリーの展開に沿って、この劇の内容を検討して行く。

「第一幕」「第一節」の最初の場面は、重慶の趙庠琛の家になっている。この家は日本軍の重慶爆撃によってかなり傷んでいる。この家の主人は趙庠琛で、彼には三人の子どもがいる。長男が立真、次男が興邦で、三番目が女の子で素淵という。

この家の長男と娘の二人が会話している。

趙立真：どうした。どうしたんだい。お父さんはまた腹を立てているのか。どうしてなんだい。

趙素淵：お兄さんのせい、私のせい、そして二番目の兄さんのせいよ。

張立真：僕は自分の罪は分かっている。結婚をしないし、役人にもならず、朝から晩まで小鳥や毛虫をいじっている。弟の罪についても分かっている。でも、僕には、お前にどんな誤りがあるか分からない。

趙素淵：全部戦争のせい。全部戦争のせいなのよ。戦争

がなければ、お父さんがこんなに不平不満をもらすこともなかったし、二番目の兄さんもきっとこっそり家を出て、前線に行き戦うなんていうことだってなかったでしょう。私だってこんなふうにはならなかったわ。(注12)

この劇は、父親の趙庠琛とそれぞれの子どもたちとの間に対立があることをほのめかす言葉で始まっている。

これで明らかなように、この劇では、父親と二人の息子、そして一人の娘たちとのそれぞれの対立が中心に据えられている。これは、一見、家に於ける親と子の対立のようにも見えるが、実は、単なる親子関係のレベルを越えて、この対立がもっと大きな「抗戦」の問題、或いは「文化」の問題へと繋がっていることが次第に明らかになって行く。

したがって、これから、趙親子のそれぞれの対立の場合を劇から拾い上げ、それに分析を加えて行くことにする。

(1) 父親と子どもたちの対立の根本的な理由

結婚もせず、役人にもならず鳥や虫ばかりいじっている長男、父にも何も告げず黙って前線に行き日本軍と戦っている次男、そして変な男性と交際している娘。こんな子どもたちに、父親の趙庠琛は強い不満を持っているようなのである。

では、何故この父親は子どもたちに腹を立てているのか。この点を立真は以下のように述べている。

趙立真：……（略）……僕には分かる。この戦争は老人たちの神経を——張り詰めた弓みたいに——もうこれ以上張れないというところに追い込んでいくのだ。だから、この際、全面解決を図らねばならないのだ。僕たちは父に同情はしなければならない。そうだろう。

趙素淵：私がお父さんを恨んだりしていると思う？そうではないわ。私は問題を解決しようとしているのよ。

趙立真：僕には分かっているさ。また僕は父親世代の文化も分かるから、いつも父親世代にも同情したいのだ。もちろん、僕たちの世代は父たちの文化を改め、進歩させる責任があることも知っているし、父親たちがこの点をはっきり見極められるよう切に望んでいる。でも、父がこれを見極められないのは、それはあくまで時代の衝突であって、僕たち親子に、何らかの到らない点があるというのではないのだよ。(注13)

立真は、この家庭の親子の対立を単に感情的対立という家庭のレベルではなく、もっと人間の思想の根本にある、世代の「文化」の違いによるものと捉えている。父親の世代の人々には、その時代を背景にして父親たちに

身について「文化」がある。

平和な時期であれば、世代の違いと言うだけで済ましてしまったかもしれない。だが「抗戦」の時期であればそうはいかない。みんなが生きているか死ぬかの瀬戸際に居るのである。もし父親世代の「文化」が、もし「抗戦」を妨害するようであれば、それは大きな問題である。これがこの劇に横たわる、一貫した判断基準である。

それは例えば次のような場合として表れる。

趙素淵は長男の立真に、父親が「抗戦」に参加している二番目の息子を手紙で呼び戻そうとしている事実を告げる。このような行為は、親子の情としては理解できるが、「抗戦」という観点からすれば、明らかに「抗戦」の力を弱めることになってしまう。

父親は何故こんなことをするのか。これについて長男の立真は以下のように説明する。

趙立真：これも時代の衝突なのだ。父は気骨のある人だ。……（略）……だから、日本に投降することができない。だから、いつも国都の後ろに付き従って移動している。あんな年寄りが、容易なことではないだろう。でも、このような老人たちが戦いに賛成していると思ったら、それは見当違いだ。気節を重んじるが、同時にとても平和を愛しているのだ。これが父の心の中——或いは我々の文化と言うべきだろうか——の最大の矛盾なのだ。必要になれば、自殺することができるが、しかし絶対に拳を振り上げて殴ることしない。だから弟が戦いに行くことは全く理に合わないことだと思っているのだ。

趙素淵：お父さんは二番目の兄を呼び戻し、結婚させ子供産ませ、父母に奉公させよとしているわよ。

趙立真：そのとおり。僕も今六十歳になっているなら、たぶんそう考えるだろう。でも弟にも弟の生命と使命がある。孝を尽くすという理由で、国を忘れることはできない。^(注14)

「抗戦」という事態に直面して、父親の「文化」の一部に問題が生じていることが明らかにされている。

父親は気骨のある人である。これは父親世代の「文化」の優れたところである。だから、日本軍に投降することは絶対に考えられない。だが、一方で強固な平和主義者でもある。これも父親の世代の「文化」である。こちらの方は「抗戦」の障害になってしまう。

この父親の「平和主義」も、時代によっては美德として評価される。だが、今の「抗戦」にはどうしても勝ち抜かねばならない。このためには、やはり、父親の「何が何でも戦いは駄目」という平和主義は改める必要があるということになる。

また、一方、次男の興邦の「文化」の方も、父との比較によって、いくらか明らかになっている。

興邦は、父親に何も告げず家を出て、日本軍への「抗戦」に参加している。「子どもは親に孝を尽くすべきである」という徳目からすれば失格であり、また、父親の平和主義からすれば、「武器を取って戦う」ということも許されるものではない。だが、興邦の「文化」、つまり「抗戦」という点では、父親に黙ってでも前線に赴いて「抗戦」活動をするというのは、寧ろ立派な行為であると評価される。

(2) 父親と娘素淵の対立の理由

父親と娘の素淵との対立では、また違った局面が描き出されている。この対立は、もちろん素淵自身にも問題がないわけでもないが、どちらかという素淵自身というより、彼女が交際している若者の方が問題視されているように思われる。

「抗戦」時期の、興邦の世代の若者が、みな興邦のような「文化」を身につけた人物だけであるとは限らない。このような、興邦と全く異なる人物をここで取り上げている。

この人物は、実は、素淵の恋人、興邦とは同級生の封海雲である。

趙立真：いいかい、父はとても誠実な人だ。父は自分の思想が最も良いものだと思っているし、自分の娘にも自分と同じようにあつて欲しいと強く望んでいる。弟も誠実で、命をかけて救国をしなければならぬと信じている。だから命をかけているのだ。封海雲は何を信じているのだい。彼は自分を飾ることができ、いくつかに黄を歌うことができるし、ポーカーが上手く、小さなお金を稼ぐことが上手で、ほかにも上手くやる……でも、彼は結局何を信じているのだ。

趙素淵：そんなこと知らないわ。私が尋ねているのは、彼が良い伴侶になれるかどうかってことなの。彼が何を信じているかなんてかまわないわ。^(注15)

立真は、美男で、遊びが上手で、お金も上手に儲ける封海雲には「信じるもの」がないと言う。

ところが、趙素淵にしてみれば、「信じる」ものなんかどうでも良い、美男で、遊びが上手で、お金も上手に儲けるのだから、自分の夫としても何ら問題がないのではないかと思っているようなのである。

では、封海雲はどのような考えを持つ人物なのか。彼自身の台詞の中にこの人物の考え方を窺ってみよう。

封海雲が、次男の興邦が家に帰って来るらしいという新聞の情報を持って趙家に現れる。そこで、興邦について、封海雲は、素淵の父親の趙庠琛に以下の話をする。

封海雲：（自分も立ち上がるが、帰ろうとはしない）趙伯父さん。小さい頃、僕は興邦と何日か机を並べたことがあります。旧友なのです。ですから、宴

を設けて歓迎しなければなりません。ご承知のように、ここ二三年来、僕はすこぶるお金を儲けました。でも、たいして苦労もしませんでした。たぶん運が良かったのでしょう。世の中は兵乱で荒れ果てているにもかかわらず、やはり運が強い人はちゃんと運が強いのですね。ですから、皆さんは貧困にあえいでいますが、僕たちのところはまあどうにかやっていますのです。そうだと。宴会を開いてあげるついでに、彼にまた前線に帰るかどうかちょっと聞いてみることにしましょう。もし彼が帰らないようであれば——彼も家で自分の仕事をきちんとすべきだと思いますよ。一人で一生戦いをするなんてことはできなのですから。そうだと。そうだと。彼がもし前線に帰らないのであれば、僕のところに良い仕事がありますから、彼にお世話しましょう。

趙素淵：何の仕事よ。

封海雲：仕事はたくさんあります。やることはいっぱいあります。

趙庠琛：だったら、またということで。他に御用がなければそれでは……封さん、どうぞ。^(注16)

「戦争」の時期には、しばしば、人の弱みにつけ込み、困難な状況を利用して、金儲けをする輩が出てくると考えられる。封海雲もこの種の人物に近いと考えられる。そもそも「抗戦」の時期にお金儲けができること自体がこういうことを連想させる。

何故こういうことができるのか。それは「信じるもの」がない、つまり、例えば素淵に父親のように「気骨」がないからである。自分が儲けられればそれで良い。だから、国とか社会がどうなろうと、どうでも良いのである。このために、彼のような人物は、結果的には「抗戦」を妨害するばかりか、さらには日本軍の味方をも平気でしてしまうことだってあり得る。

素淵の父親が、この封海雲が金を持っているにかかわらず、この人物を嫌っているのは、まさにこういう処ではないかと推測できる。しかし、素淵にはこういうところがどうも分からないらしい。

「抗戦」時期でなければ、もしかしたら封海雲のような人物は批判にされなかったかもしれない。或いは却って賞賛されたかもしれない。だが、「抗戦」期では、このような人物を許すことはできない。許せば、国が滅亡してしまう。

(3) 父親と立真の対立の原因

長男の立真は「抗戦」に直接参加しているわけではない。また両親の傍らにもいる。だが、両親は彼に不満を持っている。父親は、長男のどこに不満を持っているのか。

趙立真：僕は、また、お金を稼ぐ能力もありません。

趙老奥さん：家に妻や子どもができれば、稼げようが稼げなかるうが、どうしても稼がなければならないのです。

趙立真：……(略)……自分の奥さんに仕えるために、科学を放棄することはできません。^(注17)

両親は、立真が結婚をしてないし、正規の仕事を持たず、科学の研究ばかりしているところに不満を持っている。

もし立真が両親の言葉に反論するとすれば、自分が打ち込んでいる「科学」がどのようなものであり、これが人類、社会にいかにより有用なものであるかという点を、真正面から、強く主張する以外にないだろう。

趙立真：お父さん。私は本当にお父さん、お母さんに申し訳ないと思っています。でも——もっと他に良い方法が見つからないのです。お父さんから見れば、僕たち科学を研究するもののうち、あるものは小猫小犬をもてあそんでおり、あるものは赤い花、緑色の草をもてあそんでいるのであって、単なる暇つぶしをしていることになるのでしょうか。でも、僕たちから見れば、こういったことはそれぞれ一角を代表していて、それぞれの角から真理と自然を包み込んでいるのです。名利のためではなく、僕たちはただ生命を真理の中に注入しようとしているだけなのです。僕たちが真理をたくさん掴めば、人類の心に光明を増やせるでしょう。僕たちが自然もっと理解すれば、人類は幸福をもっと増やせるでしょう。僕たちの貢献は、人類を一日一日と目覚めさせることができるのです。なぜなら、みんなが僕たちの心や目を使って、見つけるし、理解するようになるからです。僕たちの態度は、一種の教育であり、僕たちは、私利を図らず、享楽を図らない、ただ最も高遠な真理、最も精緻な知識のために、犠牲になるのです。世の人ももし僕たちのようなこのような態度を持っていれば、僕は思うのですが、みんなは目の前の小さな利益を忘れ、もっと真理に関心を持ってくれるようになるのではないかと。^(注18)

だが、このような説得は、立真の決意を表明するためには必要であるが、相手を説得するためには必ずしも有効ではないかもしれない。もしこの種の方法で説得を行うとすれば、相手に研究の結果を実際に見せなければ、それ以前に、いくら研究の有用性を説いたとしても相手はなかなか納得してくれないだろう。まして父親は「自然科学」そのものが余り理解できない旧い「文化」の持ち主なのである。

趙庠琛：もう良い。もう良いよ。立真。こんな話し。私

はもう何回も聞いた。でも、一度だって私を納得させたことはない。私たちの時代の人たちは、身を修め、家を整えるということから始めなければならないとしているのだ。これが我々の文化であり、我々中国の特有のものである。身を修めず、家を整えない、だとすればそれが真理と言えるか。一体真理と言えるのだろうか。^(注19)

この「文化」の対立は「抗戦」時期以前からずっと引きずっていたものであると考えられる。

父親は自己修養をし、家をきちんと守って行く。ここにこそ真理があるとする。これがきちんとしていることが根本である。そして、これを社会、人々に押し広げて行く。これが社会貢献なのである。立真にはこれができてないとしている。家をきちんと守ってゆけない人間が何で社会貢献をすることができるのだ。これが父親の言い分なのである。

だが、立真のような科学者が貧困にあえいでいるのは、もともと、彼の父親のような人物がいて、彼らが長い間「科学」を理解してくれなかったからである。もし中国社会で「科学」が認められることになり、「科学」に携わる人間が、これを職業にすることができ、そしてちゃんと食べられる状況が生まれることになりさえすれば、この立真と父親との対立も自然と解消するはずである。

趙立真：……（略）……お父さん。お父さんが言われるその「格物致知」は片手間にやることではありません。だから中国はずっと発達しなかったのです。科学は一生、何代もの事業であり、根本的に、片手間にやることではないのです。今日、もし前線で命をかける人がいなければ、国家は滅亡するに違いありません。もし後方で科学のために命をかける人がいなければ、新しい中国、新しい世界は、建設されることはないでしょう。ただ小鳥小兎を養うことだけが生物学ではないのです。僕がやろうとしているのは——^(注20)

この場合は、「抗戦」期においてはどうか。

そもそもこれまで「科学」を認められていないうえに、現在の、世の中が荒れ果てている「抗戦」期に於いて、それでもまだなお「科学」をやっているとするのは、なおさら困難なことである。だが、「抗戦」との関連で言えば、「抗戦」の勝利の後に確実に来るであろう「建設」という事態になれば、「科学」の果たす役割は大きい。

だから、なおさら、現在の「抗戦」時期にあって、誰かが、どこかで、たとえ食べられなくとも、たとえ家系を存続することができなくとも、いや、そういうことは断念する覚悟をしてでも、歯を食いしばって「科学」の研究を続けて行かねばならない。これを立真は引き受けるというのである。

だから、つまり、立真を批判するということは、こういった立真の凄まじい決心を否定することなのである。

(4) 父親と興邦との対立

趙興邦が戦場から帰ってくる。

次男の興邦が直接に父親に「抗戦」の意義を知らせ、自分の行動を父親に納得させられるか。

趙岸琛：……（略）……身を捨て国に報じることは大丈夫たるものが行うべきことであるのは間違いない。だが、私たちの家庭、私たちの教という視点では、危険なことをしてはいけないということになると思っている。つまり、身体髪膚、これを父母に受け、傷つけるべからず、ということなのだ。もし私たちみたいなものが砂漠で死ぬようなことになったならば、読書人の種は滅びてしまうのではなか。

趙興邦：違います。お父さん。僕たち読書人がひとたび戦いに行くことになれば、必ず、とても、とても多くのことを学ぶことができます。書物では十年かかって理解できなかったことも、本当の殺し合いの時になると、あっという間にずっと遠くのものが見えてきて、とても、とても多くのものが分かってくるのです。^(注21)

父親は、知識人は実際の戦闘に参加すべきではないと主張する。

次男の興邦には、長男の立真とは違い、実際に「抗戦」に参加してきたという強みがある。彼は、実際の「抗戦」の場で学び、「抗戦」に育てられたのである。この劇には直接描かれてはいないが、抗戦に参加する前の興邦とは全く別人のような興邦が家に帰ってきたことを前提にしている。だから、彼の主張の方法は、その実際の経験、彼の存在そのものに基づき行われるということになる。

興邦は、知識人も実際に「抗戦」参加すべきであり、そうすることで、十年間書物では理解できなかったものも瞬時にして理解することができると述べる。このことは「抗戦」参加したことのない父親には解らない部分である。

では、興邦がどれほどの知識を「抗戦」で得てきたのか。この父親の問いに、興邦は「ほとんど精通したみたいな気がしている。」^(注22)と答えている。

趙興邦：前線では戦闘をしています。でも戦いは文学、音楽、絵画も必要とします。また、戦いは我々に歴史、地理、政治、経済、衛生、農村、工業……にも関心を持つように迫ります。しかも、それは我々に音楽と文学の関係、政治と軍事の関係といった種々の関係を知らせてきます。一つの環がもう一つの環に繋がっており、どの一つの環が欠けても駄目なのです。私はこれを文化の環と

呼んでいます。これが理解できれば、文化が何であるか、そして私たちの文化の長所と短所はどこかが分かってきます。^(注23)

戦いというのは単に武器を持って攻撃すれば良いというのではない。文学、音楽、絵画も必要であり、しかも歴史、地理、政治、衛生、農村、工業……も知っておかねばならない。そして、戦いから、音楽と文学の関係、政治と軍事の関係といった種々の関係がしだいに解り始めてくる。

そして、このようにして獲得したものが、将来どのように発展するのかについても、興邦は語っている。

趙興邦：……（略）…… 僕が言いたいのはこういうことです。戦いに行けば、僕の心は砲声に震動し始め、目に新しい中国が見えます。戦争には戦争の固有の文化があるのです。でも戦争によって、その文化は、自信から更に努力をして、悟りから更に学習をして、それ自身のものを創造することになるでしょう。それは、世界で最も新しい音楽、絵画、文学、政治、経済、そして——。^(注24)

興邦は、「抗戦」で生まれた有効な「文化」は、「抗戦」の時期だけでなく、将来、今まで存在した「文化」とはまるで違う独創的なものを生み出す可能性を孕んでいると述べる。

趙庠琛：ふん、修身齐家治国平天下（身を修め、家を整え、国を治め、天下を平和にする）の大偉業は、お前たち二人だけに任されているみたいだな。まだ、子どものくせに。

趙興邦：でも、お父さん。兄の科学精神、僕が目醒めた樂觀と希望は、おそらくどこかに間違っていくことはないでしょう。お父さん、あなたは身を修め、家を守る仕事をなさいました。僕たちの世代、この世代だって、当然ただ僕たち兄弟のやっているようなところだけに頼ることはできません。国を治め世の中を平和にする仕事だっしなければならぬのです。見ていてください。お父さんが八十歳になった時には、今とは違う中国を見ることができましょう。活発で、目覚めていて、堂々としていて、平和で、文雅な中国です。^(注25)

父親は、おそらくまだ、興邦の「抗戦」での成長そのものも信じられないのである。

ただ、興邦は父親と徹底的に対立し、父親の持っている「文化」を全面的に否定しているわけではない。興邦の方は、父親世代の「文化」も認め、それと「抗戦」の時期に生まれた「文化」の優れた部分との融合、そこから今までと違った全く新しい中国が出現することを確信

しているのである。

では、どのようにすれば父親を説得することができるのか、この課題は、ここでは、まだ残されたままである。こうして「第一幕」の親子の対立は、一旦、打ち切られる。

この幕は、以下の台詞で終わる。最後は、興邦が実際に参加した「抗戦」のことを家族に話すという形で、次の第二節の実際の「抗戦」の場面へと繋げられている。

趙興邦：……（略）……。ああそうだ。綏遠の戦いの話をしよう。この勝利で、私たちの一般の人、しかも漢族、満族、モンゴル族、回族、チベット族などの一般人たちが、どんなふうにも心を一にして敵を打ち破ったかを聞かせてあげよう。^(注26)

四

「第一幕」の「第二節」は、趙興邦が参加した「綏遠の戦い」^(注27)の場面である。

ここで取り上げられている「綏遠の戦い」というのは1936年の戦いであり、劇の「現在」からすると五年前のことである。だから、興邦は五年間「抗戦」に参加していたことになる。

この場面で、趙興邦はその隊の「主任」という身分で登場してくる。

この劇では、この「抗戦」は、中国軍だけの勝利というのではなく、もっと広範囲の各地域の、各民族の団結によって日本軍に勝利したものであるという方向で描かれている。作者のこうした意図が最もはっきり表れている例が、日本人の登場であろうと思われる。この日本人の場合を考えることによって、作者がこの「抗戦」をどのように捉えているのかが明らかになるのではないか。

このことは、以下の、日本人が、中国軍に投降してきた理由を述べている部分に窺うことができるように思われる。

趙主任、あなたをご存じのように、あの風雪の晩、私は一心同体の駿馬に跨り、鉄砲、刀を抱いて、投降し、正義のために尽くそうとしました。私は二度と日本軍閥たちの盲目的な指揮を受けることはありませんし、彼らのために恐ろしい残虐行為をすることもありません。私は砂漠で戦死するという栄光を捨て、正義に投降しました。少しも悔いはありません。あなた方の長官が自ら私の刀を受け取り、自ら風雪から身を守る皮衣を肩にかけてくれました。私はいつも思っています、正義が勝利した時、あなた方を桜満開の日本に招待しようと。戦争がなくなり、平和になれば、その時、我々は天真爛漫な子どもみたいに、一緒にお酒を飲み歓談しましょう。^(注28)

中国軍に投降したのは、この日本兵自身が、日本軍が

余りに残酷であり、逆に中国軍の側に「正義」があると判断したからであると述べている。

「正義」という徳目に注目したい。この「正義」というのは、ただその人物の頭の中にあるというだけの静的なものではなく、その人物が「悪逆非道」に遭遇すればこれを絶対に許さないといった「ある態度」を生み出す可能性が極めて大きいものと考えることができる。日本兵が中国軍に投降し、日本軍と戦うのは、中国軍の側に「正義」があると判断したからである。また、中国人は言うまでもなく、各地域、各民族が日本軍と戦うのも、やはり自分たちに「正義」があると考えているからであろう。つまり、「抗戦」と「正義」の関係で言えば、人が「抗戦」を行うのは、自分の側に「正義」があると信じているからである、とすることができる。この時、「正義」は国家、地域、民族を越えたところあるもので、人々を動かす。

このことから考えるに、作者が、「正義」という言葉で示そうとしているものは、最も普遍的、絶対的な「善」なるものといえるものであって、「正義」はその一つのシンボルである、と言えるのではないか。「抗戦」が「これ」を守るために（或いは「これ」に基づいて）行われるのであれば、人はみな、中国人は言うまでもなく、各地域、各民族、たとえ日本人でさえ、必ず「抗戦」に参加したいという気持ちになるのである。

作者は、この場面で日本兵を登場させたのは、中国軍に投降した日本人が「正義」が分かれると褒め称えるというより、むしろ中国の「抗戦」の側に「これ」があることを示すために、日本兵の場合を持ち出したのであると解釈したい。このような表現によって、この劇を観た人々を「抗戦」に参加したいという気持ちにさせようとしているのである。

五

「第二幕」の「第一節」は、「第一幕」「第一節」から数日たった日ということになっている。前場面からの展開を考えれば、この幕で、父親の趙庠琛と長男の立真、次男の興邦そして娘の素淵の和解がどのような理由で、どのように行われるか、という展開になって行くことが予想されるだろう。「対立」から和解という流れである。したがって、ここでは「和解」のされ方に焦点を当て分析して行くことにする。

興邦については、兄の立真の問いに答えて、興邦はもう暫くしたら家を離れるのだと告白する。興邦はまた「抗戦」に参加しようとしているのである。彼にはもうこの家での時間は余り残されていない。こういった中で意外な急展開が始まる。

趙興邦：僕は南に行こうと思っています。

趙立真：北方のことはどうするのだ。

趙興邦：妹に行ってもらいます。妹はもうその気になっているんです。

趙立真：妹も説得したのか。お前は本当に凄いなあ。

趙興邦：妹が僕に意見を求めてきたのです。

趙立真：でも、お前、ちょっと考えてみてくれよ。お前は行かねばならないことは分かる。どこへ行こうがかまわない。でもなあ、妹も行ってしまったら、私だけ一人残され、どうにも……^(注 29)

兄弟のうち、一番末の妹の素淵が興邦と同じように前線に行くこと決心したというのである。そればかりではない。

趙興邦：どうにかして父上にも出て行ってもらわねばなりません。

趙立真：ええ、何だって。

趙興邦：父は六十歳になったばかりですから、まだ年寄りではありません。

趙立真：父は西洋人ではないのだ。分かるだろう。

趙興邦：父には相当な能力があります。なのに、どうして出て行って仕事をしないのでしょうか。^(注 30)

立真は、父親も仕事をする能力があるのだから「抗戦」活動の仕事に就いてもらわねばならない、というのである。このストーリーの展開は、興邦が、父親に自分の行動の意味を納得させるという段階を遙かに越えて、一気に、父親も実際に「抗戦」活動に参加させようとする更に高い次元の方向に動き始める。

(1) 父親と娘の素淵との和解

まず娘の素淵の場合である。ここでは、如何に、父親は娘を受け入れ、娘は父親を理解したかを見て行く。

ストーリーの流れから、素淵は、「抗戦」から帰ってきた興邦の影響を受けて、自分のこれまでの態度の是非、或いは自分の恋人の正体も見え始め、このことによって、同時に、父親の考えの方も理解できるようになって来た、と解釈すべきだろう。

趙素淵：お父さん。本当のことを言います。私はもともと封海雲を愛していなかったのです。でも、お父さんが私に余りも厳しすぎて、出口が見つけられず、鬱憤を晴らそうとして、彼と付き合ったのです。でも、二番目の兄さんが帰ってくるに及んで、二番目のお兄さんと彼と比べてみて、分かったんです。彼と付き合ったことは、私の一生の汚点です。お父さん、私が女の子で、何も分からないなどとは思わないで。おおよそ二番目の兄さんが理解していることは、私は理解できます。同世代の人間は同じ母親が生んだ息子、娘のようなものなんですから。^(注 31)

この言葉が父親との和解（父親への「謝罪」）と考えられる。だが、それだけで終わらない。さらに、素淵は自分も興邦と同じように「抗戦」の前線に行くことを父親に求め始めるのである。

趙素淵：お父さんまださっきの話が終わってないわ。

趙庠琛：何のことだ。

趙興邦：ほら、僕がお父さんに尋ねたではありませんか。

妹が前線に行っても良いかって。

趙庠琛：ウーーン

趙素淵：どうなの、お父さん。

趙庠琛：行っても良いよ。

趙興邦：行っても良いですって。

趙素淵：お父さん、まるで人が違ったみたい。

趙庠琛：私でさえ自分自身が分からなくなりました。

趙興邦・趙素淵：どうしたの。お父さん。

趙庠琛：大丈夫だ。何でも無い。私は一体全体自分がどこに立っているのかははっきり分からなくなっている。自分自身が分からなくなったのに、他の人間を管理するなんてできはしないのだ。これ以後、私はもうお前たちのことをあれこれ言うことはしないよ。

趙素淵：お父さん。どうしてそんなにひどく怒っているの。何事もゆっくり相談して決めましょう。

趙庠琛：私は決して腹を立ててはいない。本当に怒ってはいないのだ。^(注32)

父親は素淵の「前線」行きに同意した。何故同意したのか。父親自身の発言では、この理由として、父親は自分がどこに立っているのか分からなくなったと説明している。

これをどう解釈すればいいのか。

これは、父親の頭の中から、自分が今まで物事を判断する基準としてきたもの、或いは主張の際に論拠といったものが消えてしまったと告白していることになるのではない。自分の息子や娘を叱り、彼らの行為を批判し、息子に反対する際の根拠としていたものがなくなってしまったのである。だから、息子や娘の意見を批判し、反対しなくなったのである。

これは、視点を変えれば、「抗戦」の影響を受けて、今までとは違う「文化」、いわば新しい考え方を持った父親が出現したと取ることができるだろう。

ここに見られる父親の驚くべき変化は、このように解釈できるのではないか。

(2) 父親と長男の立真との和解

次が父親と立真の和解の場面ということになる。彼の場合は「科学」に従事しているものであり、「抗戦」に直接参加する興邦、素淵の場合とは違う。

趙興邦：結局ということなの。お父さん。

趙庠琛：ご覧。立真が何日か前に私に一冊の本をくれた。

趙素淵：生物学大綱ではないの。お兄さんが私に読むように言ったのだけど、いつも時間がなくて。

趙庠琛：違う、歴史の本だ。ある生物学者が書いた歴史なのだ。ここ数日、何ページかめくってみた。ここに書いてあることが、全部分かったとか、すべて賛成するなんてことは言うつもりはない。でも、その本は、立真の話——生物の起源と変異から人類の歴史を説いているし、生物の生滅の道理から人類はどのように生きるべきであるかという意見を提出していて、それが理に適っているということを実証していた。その本が述べていることが正しいとか正しくないと言うことはともかく、その本は確かに「格物致知」からもたらされた学問である。立真の話——なんと叫んだか、何とかの科学は真理を追究するためのものだ——全く間違っていたはいなかった。あいつがもし間違っていないのなら、私は二度とあいつを自分の道に従わせるなんてことはできない。私が知っていることは余りにも少ないのだ。

……（略）……

趙庠琛：だから、私はもう二度と立真に干渉することはない。彼は新しい水なのだから、私の古い堰で押し止めることはできない。^(注33)

では、何故、父親は、これまで理解できなかったものが、今は理解できるようになったのか。

これも興邦の影響、或いは「抗戦」の影響と考えて良いだろう。この影響で、父親は自分たちの時代の「文化」から離れることができた。このために、先入観なしに、立真の「科学」を見ることができるようになり、この結果、立真の考え、「科学」が正しいと理解できるようになったと考えたい。

父親が立真を受け入れた直接の理由は、「科学」の研究結果という部分ではなく、研究方法、つまり「格物致知」ということに「正しさ」を認めたからである、と述べられている。父親は、その「科学」の方法の正しさの証拠を、自分たちの時代の「文化」の真理探究の方法である「格物致知」と合致するからだとしている。「科学」の真理探究の方法が正しい以上、立真の決意に反対しないと決めた。ここには、それぞれ凡そ学問と呼ばれるものの根本には、時代を超え、普遍的に、動かし難い正しいものが存在しているものだ、という作者の認識があると理解したい。

この結果、父親は立真に「自分の思うようにやりなさい」と言い、「これから科学を止めさせることはしない」となったのである。

(3) 父親と次男の興邦との和解

最後に、父親と次男の興邦との和解が置かれている。この劇に於ける興邦の役割については、もう再三述べて

いる。

趙庠琛：……（略）……興邦お前もそうだ。好きにしなさい。

趙興邦：私の過ちは知っています。

趙庠琛：お前がまだ帰ってこなかった時のことだ。——良いか、私はこの数日間寝ることができなかった。ずっとこれらの問題を考えていたのだ。——私はお前が軍隊と毎日一緒にいれば、もっと良いものを学ぶことができるのではないかと思うのだ。お前が北方での戦いの話をしてくれ、それを聞いて、私は今回の戦争のことを知った。なんと我々の兵隊にも文化があったのだ。……（略）……私には、お前たちを管理しなで、自由にやらせるということだけなのだ。……（略）……

趙庠琛：……（略）……いずれにしろ、私はお前たちを二度と管理しようとは思わない。以前、私がお前たちをきちんと管理できなければ自分に対して申し訳ないと感じていた。だが、今は、もしお前たちを管理すれば、逆に、申し訳ないと思う——誰に対して申し訳ないのかははっきりとは分からないのだが。この戦争が一切を変えたのだ。

趙興邦：お父さん、悲観的にはならないで下さい。戦争は一切を変えました。でも必ずしも悪い方に変えたのではないのですから。^(注34)

ここにおいて、興邦は父親を完璧に説得したことが明らかにになっている。ここでの父親は、「第一幕」の父親とは全く違っている。

いささか繰り返すことになるが、以下にこの作品で作者が興邦を使ってどのように父親を説得したのかという部分を以下にまとめておこう。

この劇の説得法を吟味すると、作者は「実際に」というところをポイントにしていることが分かる。「実際に」見たことや体験したことの方が、如何なる机上の論にも優るというという一貫した考えが、この作品における「説得」に関わる部分の根底に流れているように見える。

この劇の主人公、次男の興邦は、この劇に登場したときにはもうすでに「抗戦」に「実際に」参加した人物と設定されている。だから、彼が父親と論争するときの最大の強みは、彼が「抗戦」に「実際に」参加したというところであり、彼自身が「抗戦」に参加して「実際に」成長して父の目の前に「実際に」立っているところである。父親と論争するときに、この部分をフルに使っている。

こうして、最終的に、父親は興邦の主張に納得したのである。

(6) 父親自身の「抗戦」参加の表明

父親自らも家を出て「抗戦」活動に出て行くことを表明するのが、次の場面である。これが、興邦の「父親の

説得」の最大の成果である。彼は自分の妻に以下のように告げる。

趙老婦人：……（略）……何の用事で私を呼んだのですか。だれかが息子たちに嫁を世話してくれるとでもいうのですか。

趙庠琛：いやそうじゃない。ちょっと、お前と相談したいことがあるのじゃ。張修之から電報が来たんだ。私に手伝ってくれないかというんだが、どうだろう、行っても良いかな。

趙老婦人：その人はどこで、何をしていますか。

趙庠琛：成都で運輸業を営んでおり、私に文章係をやらせたらしい。

趙素淵：飛行機で一時間だわ。

趙老婦人：素淵、お前は黙ってなさい。駕籠に乗れば半月もかかるのよ。お父さんは飛行機にも乗れないでしょう。（趙庠琛に向かって）あなたにやれるの。もうそんな歳なのに。もし行くとすれば一家で行かなければならないわ。そうすれば安心です。

趙庠琛：一家では行けないから、こうしてお前に相談してるんだよ。^(注35)

ついに、老婦人を除く、この家族のすべての者がそれぞれの立場で「抗戦」と関わって行くことになった。「抗戦」活動に一人、また一人加わって行く。このような、知らずに引き込まれるような流れがこの劇にある。

これに関連して、以下の台詞がある。

趙興邦：いいですか。僕たち中国人は誰も戦いなんか好んではいません。でも、今日、もっと戦わなければ、僕たちは永遠に平安の中で生きて行くことはできないでしょう。北方で、七十歳過ぎの秀才、六十歳余りの老紳士が銃を手に取りました。僕は自分の目で見たのです。まさかあの老人たちが心から戦いを望んでいるようには思えません。そうではないのです。あの人たちは呼び声を聞いたのです。「全ての中国の老若男女よ、あなた方は平和を望んでいますか。だったら戦いに立ち上がりなさい。」ちょっとでも血が通っている人であれば、誰も耳を塞いでは駄目です。聞こえないふりをしては駄目なのです。母さんは言いましたよね、もう四年も戦っているのに、と。でも僕たちはまだ日本軍を追い出していないのです。だから、日本軍を追い出すために、今日、僕たちは、今までよりもっと力を入れて戦っているのです。^(注36)

この台詞の内容こそが、作者が、この劇でもっとも主張したいことではないか。男女を問わず、若者たちだけでなく、「老人」たちも「抗戦」参加するべきだというメッセージである。

そして、この幕の、以下の最後の興邦の台詞が、次の「舞踏」の場面を開くことになる。ここには、これ以後の「抗戦」の展開の予想、「抗戦」の方法や目標、そして日本軍の南進へ挑む興邦の決意というべきものが明らかにされている。最後に、これを引用しておこう。ここでは中国が「龍」、日本軍が「毒蛇」に喩えられる。

趙興邦：日本の軍隊は南進しようとしています。僕は再度連中に戦いを挑みにいきます。良いですか、仮に中国が一匹の眠った龍だとします、日本軍閥はまさに毒蛇です。それ——この毒蛇——は眠った龍をかみ殺そうとしているだけでなく、眠った龍の友人、インド、ベトナム、ミャンマー、タイ、南洋群島のようなところをも、すべて一口に飲み込もうとしています。僕たちは噛み殺されても良いですか。それが僕たちの友人たちを飲み込むのを見ただけで良いですか。否、僕たちはすでに目覚めました。そうして、すでに彼らと四年戦いました。この蛇に反撃したということでは、僕たちは先鋒なのです。僕たちは現在先鋒の資格でもって、僕たちの友人を助けに行き、彼らにも僕たちと同じように毒蛇に反撃させ、彼らの自由も守らせ、彼らの独立を戦い取らせなければならないのです。僕たちが彼らに何も望まなければ、彼らも僕たちに何も望まないのです。みんなが望んでいるのは平和です。だから、みんなは一斉に拳を振り上げ、拳を一斉に平和を脅かす毒蛇の頭に叩きつけなければならないのです。^(注37)

六

ここまでの考察で、作者が、何故、「綏遠の戦い」、「龍蛇の舞」を「歌」「舞踏」で表現し、最後に、一つの場面を使って、二十年後の「未来社会」までも舞台に描き出しているのかも、いささか明らかになってきているように思う。

老舎のこの作品は、すでに何度も言ったが、言うまでもなく、「抗戦」劇である。したがって、この劇は、これを観客に見せることによって、観客を、自らも「抗戦」に参加しようという気持ちにさせることを最大の目的にしている、といえる。(このことを「観客の説得」という言葉で表わそう。)

もちろん、この劇では、息子たちが父親を説得するということは、同時に、観客を説得するということに繋がっている。だが、よく観察すると、この劇の場合、「父親の説得」と「観客の説得」にいささか「ずれ」があるように思われる。「父親の説得」は「観客の説得」とはイコールであるが、「観客の説得」は必ずしも「父親の説得」とはイコールではないのである。

また、この劇に於ける相手の説得に、作者は「実際

に」というところを根底に据えて行っており、この方法で採った興邦の「父親の説得」については前節ですでに述べたので、ここでは「観客の説得」のメカニズムについて述べることにする。

そもそも劇というのは小説とは違って、観客の目の前にその光景を作りだし、人物を「実際に」登場させることができるというところに特徴がある。作者は、この劇で、このところを、「観客の説得」に最大限に活用しようとしていると考える。

①「第一幕」「第二節」の「綏西の戦い」について

作者は、ここでは、ひとつの場面を使い、興邦が参加した「抗戦」を舞台の上で再現している。

この場面は、物語の展開そのものには必要ないと思う。登場人物の台詞(言葉)で戦いの状況を説明すればそれで済む。それなのに、わざわざ一つの場面を使って「実際に」戦いの光景を舞台の上に作り出しているのである。この時、この光景を「実際に」見せるのは、観客に向かって行われているのであって、決して登場人物の父親に対してではない。

この場面で、趙興邦は、実際に「抗戦」に参加して各民族の人々と共に日本軍と戦い勝利したという経験を持つ人物であることが、事実として、観客の前で、証明された。また、同時に、この場面によって、興邦の発言は、この経験に基づいて行われているという事実も、観客に対して示されたことになる。ここにおいて、観客の、興邦に対する見方が確実に変わってくる。第二幕以後、観客は、興邦を、実際に「抗戦」に参加した青年のうち、最も理想的な、そして最も優秀な人物と考えるようになるのである。

第二幕以後の次なる劇の展開において、父親に対する興邦の説得力もさらに増してくることが予想されるが、「第一幕」「第二節」の場面があることによって、たとえ興邦の主張がたとえ幾らか強引なものになったとしても、少なくとも観客の方には、この強引さが不自然なものには思われなくなってくるのではないか。

②第二幕第二節の「龍蛇の舞」と第三幕「未来の平和な社会」について

最後に二つの場面が用意されている。一つは「舞踏」だけで表現される「龍蛇の舞」、そしてもう一つが「平和な未来の社会」である。この二つの場面は、この劇の観客に対する、これまで行った興邦や立真の主張、将来の展望の正しさの証明として使われている。

この劇には、観客に「抗戦」への参加を納得させるという大前提があるが、この劇の興邦、立真の主張の正しさの度合いが増せば増すほど、観客がそれに納得する確率はそれに比例して高くなっていくであろうことは推測できる。

こうするために、劇の特徴を最大限に活かし、この興邦や立真の主張や見解が実現した姿を観客に「実際に」見せるのが、最も有効であると考えられることができる。こ

の観客に「実際」に見せるということのために用意されているのが「龍蛇の踊り」と「青島の未来社会」の場面であると考えられる。(たとえ虚構とはいえ) 観客は「実際に」それを自分の目で見たのだから、(少なくともこの劇場では) 確かに興邦の主張、立真の見解は正しかったと思うしかないと思われる。

この作品に、老舍のこれまでの作品に比べていささか「抗戦」の宣伝色を強く感じるのは、もしかしたら、この劇に、こういう表現形式を用いているかもしれない。

③「龍蛇の踊り」「青島の未来社会」の部分の演出について

この劇の主張が観客に上手く受け入れられるかの成否は、観客に直接訴えるかける度合いの強い「龍蛇の踊り」「青島の未来社会」の場面の作り方の出来如何に左右されるだろうことが予想される。

ただ、この部分の表現は、実は演出家、役者たちに依存する部分も大きいと思われる。或いはこのような表現は、劇という性格からして、実演の試行錯誤の中で一つの型が出来上がって行く可能性も含んでいる。すでに何作も劇を発表してきたこの作家には、このことが分かっていたと思われる。

この点に関連して「序」に以下のような作者の言葉がある。

第一幕第一節は綏西という背景にしている。これはただ単に綏西には民族が集まるのに便利であるというだけである。もし妥当でないとされるのであれば、自由に場所を変えていただいて結構である。第三幕は青島を背景にしたが、これは単に景色が美しいという理由だけであって、他に理由はないのだから場所を変えてもらっても結構である。(注38)

この劇には、演出家、役者の選択の余地、或いは創作の余地をも残こされていることを、作家が告白しているのである。このことは、同時に、作者の主張の方向さえ見失わなければ、演出家の演出の仕方、役者の表現の仕方によって、脚本段階より更に面白いものが出来上がる可能性が含まれているということにもなる。

おわりに

この小論で、『大地龍蛇』の特徴と思われるものを幾つか取り上げ論じてきた。この結果、この劇の本質のようなものを少しは明らかにできたのではないかと思う。だが、まだ課題も残している。

この『大地龍蛇』は、老舍の周到的計算の下で創作されており、劇の構成は図式的でさえあり、それほど複雑ではない。ただ、この劇に歌や舞踏による表現形式を採用したことで、これまでの作品のそれに比べると、作品

分析するのに、劇のストーリー展開の枠を越える視点が必要であり、作者の創作意図の読み取りが少し難しくなったと感じた。

また、この『大地龍蛇』は、日本軍に対する「抗戦」主張の色合いが他の作品に比べるとかなり強いように思われる。一般的に、作品の「抗戦」主張が強ければ強いほど、「抗戦」が終われば、その作品は無用のものとして顧みられなくなることも考えられる。もしかしたら、この作品はこんな弱点を持っているかもしれない。ただ、「抗戦」を主張する劇の展開の仕方には確かに老舍特有のものがあつて、老舍の一連の作品を考える上では、これが重要な作品のひとつであることはいうまでもない。

その他、この作品に於ける日本人の登場、作品での未来社会の創造も面白い。これについては、すでに本論で幾らか言及したが、老舍の他の作品にも似たようなものがあり、そのような作品との関連で、この劇のこの部分を更に考えることも必要だろう。

さらに、これ以後、この時期の老舍の劇がどういう展開を見せるのか、考察を続けていきたい。(完)

【注】

この小論のテキストは『老舍全集9』(人民文学出版社・1999)に収められているものを使用した。したがって、以下の【注】に付されている作品のページは、『全集』のものである。なお、この作品は『老舍劇作全集1』(中国戯劇出版社・1982)や『老舍文集第10巻』(人民文学出版社・1986)にも収められている。

- (1)『老舍小説全集10』(学研・1983)に収められた日下恒夫編「老舍年譜・老舍著作目録」を参照。また、首都図書館編『老舍研究資料編目』(北京市図書館学会・1981年8月)には桂林の「文芸雑誌・創刊号」(1942年1月)の67-84頁、1巻2期の49-59頁に掲載されているという記述がある。なお、同様の記事は『全集9』の冒頭の「本巻説明」にもある。
- (2)すでに、拙論「老舍『残霧』試論」(八戸工業大学紀要第25号・平成18年2月)、拙論「老舍『国家至上』試論」(八戸工業大学紀要第26号・平成19年2月)、拙論「老舍『張自忠』試論」(八戸工業大学紀要第27号・平成20年2月)、拙論「老舍『面子問題』試論」(八戸工業大学紀要第27号・平成21年2月)で論じたことがある。
- (3)『大地龍蛇』「序」p.375。なお、東方文化協会がいかなるものかについてはまだ調べがつかない。今後の課題としたい。
- (4)『大地龍蛇』「序」p.375
- (5)『大地龍蛇』「序」p.376
- (6)『大地龍蛇』「序」p.376

- (7) 『大地龍蛇』 「序」 p.376
- (8) 『大地龍蛇』 「序」 p.376
- (9) 『大地龍蛇』 「序」 pp.376-377
- (10) 『大地龍蛇』 「序」 p.377
- (11) 『大地龍蛇』 p.400
- (12) 『大地龍蛇』 pp.382-383.
- (13) 『大地龍蛇』 p.384
- (14) 『大地龍蛇』 p.385
- (15) 『大地龍蛇』 p.385
- (16) 『大地龍蛇』 pp.387-388
- (17) 『大地龍蛇』 p.392
- (18) 『大地龍蛇』 pp.392-393
- (19) 『大地龍蛇』 p.393
- (20) 『大地龍蛇』 p.394
- (21) 『大地龍蛇』 p.395
- (22) 『大地龍蛇』 p.397
- (23) 『大地龍蛇』 p.397
- (24) 『大地龍蛇』 p.398
- (25) 『大地龍蛇』 pp.398-399
- (26) 『大地龍蛇』 pp.399-400
- (27) 「綏遠事件」は次のようなものである。「(1936年11月) 関東軍によって支援された内蒙古の徳王が綏遠に軍を起こした際、傅(ふ)作義の率いる綏遠軍がこれを打ち破り全国の反日・抗日民衆の大きな喝采と支援をえた(綏遠事件)。ただでさえ故郷の満州から遠くひき離され不満を持っていた張学良麾下の東北軍内部では、綏遠軍の戦いに触発され反共討伐よりも抗日戦を望む声がいっそう高まった。」(『中国近現代史下巻』(東京大学出版会・1982) p.406)。このように「綏遠事件」は「西安事件」を誘発することにもなった。
- (28) 『大地龍蛇』 p.405
- (29) 『大地龍蛇』 p.410
- (30) 『大地龍蛇』 p.410
- (31) 『大地龍蛇』 pp.414-415
- (32) 『大地龍蛇』 pp.419-420
- (33) 『大地龍蛇』 pp.420-421
- (34) 『大地龍蛇』 p.421
- (35) 『大地龍蛇』 pp.422-423
- (36) 『大地龍蛇』 pp.423-424
- (37) 『大地龍蛇』 pp.425-426
- (38) 『大地龍蛇』 「序」 p.379